

# 1979年から1981年の編集委員時代のこと

## 成相 恭二

〈国立天文台名誉教授〉

e-mail: nariai.kyoji@gakushikai.jp



正直言って、これほど何も思い出せないのは、何もやっていなかった証拠なのでしょう。タイトルにある期間は私が編集長を勤めた期間だと思いますが、小平さん、森本さん、青木さんの後で編集長をやったことだけは思い出せるけれど、ほかの委員が誰だったか、期間内にめばしい成果を上げたことがあったか、と聞かれても何も答えられません。

理由の一つは大学院学生で天文台に出入りするようになった1962年頃から、委員でもないのに月報の編集会議に顔を出したり、委員にして貰ってからはNASA、ニース天文台に行った期間を除いて、ほとんどずっと月報編集にかかわっていたからでしょう。

「古き良き時代」は下保さんが編集長だったかな。深須さんという天文台職員が編集を手伝っていて、編集会議に行くとお茶（と多分お菓子）が出てくるのが何よりの楽しみでした。後に編集長をやられた関口さんや、天体搜索部の香西さんが編集委員だったように思います。

そのころの天文月報の表紙は、その月の記事から写真を選んでバックに色がある表紙の真ん中に小さく置いていましたが、写真を表紙一杯に使おう、と提案したのは私でした。多少経費は高くなるが見栄えは良くなったと思います。

それまではアルバムページというものがその号の真ん中であって、写真はすべてそこに集められました。活字だけの印刷なら安い紙が使えるのですが、写真には真っ白な特別な紙を使うので、そうしなければならなかったのです。表紙裏表紙を除いた全部を、それまでよりも上質のコート紙にして、写真を記事の中で使えるようにしたのも私が提案したと思います。

そうなった後の話ですが、写真が2段組みの活字スペースに納まるようにすると小さくて見栄え

がしません。2割でも大きくできれば良くなりますから、何とかページの端っまで乗せられないか、と印刷所に聞いたら、「断ち切り」という方法がある、と教えてくれました。写真を版に直すときにページの外にはみ出すような大きさに作っておき、最後の組版のときに枠外にはみ出る部分は切ってしまうのだそうです。これも私が提案した覚えがあります。

ということで私も天文月報に何がしかの寄与をしているという記憶があるのですが、記憶を美化してしまって編集委員会で議論されたことをすべて自分の手柄にしているかもしれません。すべて平の委員のときの話です。

当時は活版印刷の時代ですから、校正は初校、再校、三校とあり、初校は委員が見た上で著者校正に回し、再校は委員だけで行い、三校は編集委員が1、2名印刷所まで出かけて行く出張校正でした。印刷所は麻布の近くにあったのではないかと思います。三鷹から行くので1日仕事です。このときの楽しみは印刷所でお昼を出してくれることで、たいていは丼ものだったと思いますが、学生に毛が生えたくらいの若造だった私にはごちそうでした。

編集長時代は春秋の天文学会の年会ではプログラムを片手にめばしい講演者を見つけては原稿をお願いしていました。1会場のころだったからそれができたのでしょうね。半年分お願いするとホッとしていました。何も思い出さないと最初に書いたけれどこのことだけ覚えています。今のようにならなくなってしまうと編集委員総出でも足りませんね。どうしていらっしゃるんですか。

そういうわけで、編集長ではなかった期間の思い出の方が長くなってしまいました。記憶力の悪さを噛み締めながら筆をおきます。